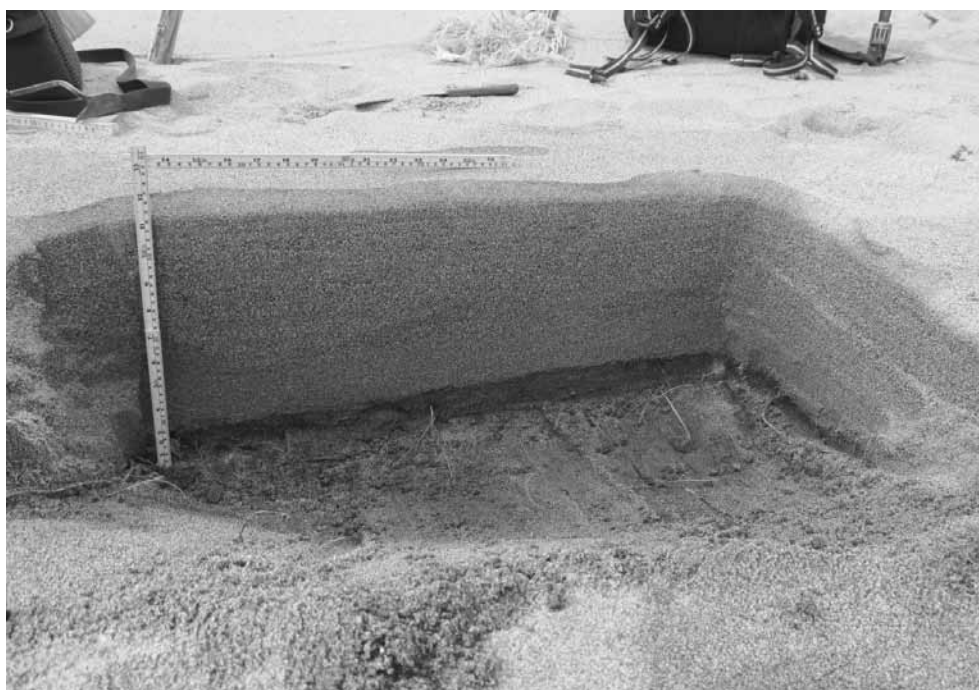


QR Newsletter



第四紀通信

Vol. 19 No.2, 2012



仙台空港付近の海岸で観察された東北地方太平洋沖地震の津波堆積物（谷川晃一郎撮影）中～粗粒砂を主体とし、津波前の地表面（ピット底部の褐色層）を覆って、約 30cm 堆積している。

Vol. 19 No. 2

April 1, 2012

日本第四紀学会大会案内・・・・・・・・・・	2	新研究委員会紹介・・・・・・・・・・	12
日本地球惑星科学連合大会案内・・・・	3	第2回評議員会議事録・・・・・・・・	14
学術賞講演会・シンポジウム・・・・	7	第4回幹事会議事録・・・・・・・・	16
市民向けイベント報告・・・・・・・・・・	8	会員消息・・・・・・・・・・	16
研究委員会総括報告・・・・・・・・・・	9		

◆日本第四紀学会 2012 年大会案内（第 2 報）

<大会の概要>

大会名称

1. 「熱い討論 第四紀学会 2012 年大会 in 立正大熊谷（立正大学 140 周年記念）」

2. 日時・開催場所：2012 年 8 月 20 日（月）～8 月 22 日（水）
立正大学熊谷キャンパス（埼玉県熊谷市万吉 1700）

3. 日程

8 月 20 日（月） 一般研究発表（口頭およびポスター）・評議員会
8 月 21 日（火） 一般研究発表（口頭およびポスター）・総会・懇親会
8 月 22 日（水） シンポジウム
8 月 23 日（木） アウトリーチ巡検

4. 発表の申し込み締め切り：2012 年 6 月 25 日（月）

本大会は 1 部セッション制で、2 会場で行う予定で検討しています。詳しくは 4 月下旬に送付予定のメールと学会ホームページ、および 6 月 1 日発行予定の次号の通信をご参照ください。

5. シンポジウム

8 月 22 日 公開シンポジウム「氷床コアから得られる第四紀環境情報（仮題）」

世話人：福岡孝昭

共催：埼玉県立川の博物館

講演の詳細については次号あるいは学会ホームページで案内します（4 月下旬）。

6. 巡検の概要

8 月 23 日 アウトリーチ巡検「荒川上中流（仮題）」（案内者：田村俊和）（日帰り）

詳細と申し込みは 4 月下旬に送付予定のメールと学会ホームページ、および 6 月 1 日発行予定の次号の通信をご参照ください。

7. 大会実行委員会

実行委員会委員長 福岡孝昭

連絡先：2012 年大会実行委員会事務局

〒360-0194 埼玉県熊谷市万吉 1700

立正大学地球環境科学部 福岡孝昭研究室

大会用 E-mail：準備中です。学会ホームページをご覧ください（4 月下旬）。

TEL/FAX：048-539-1640（出来るだけ大会用 mail でお願ひします。）

◆日本地球惑星科学連合 2012 年大会プログラム

日本地球惑星科学連合 2012 年大会が下記のとおり開催されます。同連合は 2011 年に公益社団法人化されました。連合大会は、地球惑星科学を学際的に盛り上げていく場として、年々重要度を増しており、2012 年大会の発表申込数は 3800 件を超えています。みなさまの積極的な参加を期待しています。

- ・期日：2012 年 5 月 20 日（日）～ 25 日（金）
- ・場所：幕張メッセ国際会議場
- ・大会詳細：<http://www.jpogu.org/meeting/index.htm>（各セッションの日程と会場を確認できます）
- ・事前参加登録（割引料金）締め切り：2012 年 5 月 7 日（月）17:00

●第四紀関連オーラルセッション（一部抜粋）

日時* > セッション記号：セッション名 会場

*AM1=9:00～10:30、AM2=10:45～12:15、PM1=13:45～15:15、PM2=15:30～17:00

- 5 月 20 日 AM1+2 > A-HW28H：中部山岳地域の自然環境変動 101A
- 5 月 20 日 AM1 > H-CG31：海底地すべりと海底地盤変動と私たちの社会 105
- 5 月 20 日 AM1～PM1 > M-IS25：津波堆積物 101B
- 5 月 20 日 PM1+2 > H-DS25：湿潤変動帯の地質災害 102B
- 5 月 20 日 PM1+2 > H-RE31：地球温暖化防止と地学 104
- 5 月 20 日 PM1+2 > O-04：日本のジオパークー見どころ紹介と新ジオパークの公開 302
- 5 月 20 日 PM2 > H-CG30：堆積物・堆積岩から読みとる地球表層環境情報 101B
- 5 月 21 日 AM1+2 > M-IS32：ジオパーク 202
- 5 月 21 日 PM2 > S-SS36：プレート境界型巨大地震に誘発される内陸活断層地震 303
- 5 月 22 日 AM1+2 > H-DS06：Natural hazards and disaster reduction in Asia, Africa, and the Pacific rim 301A
- 5 月 22 日 AM1～PM1 > S-SS35：活断層と古地震 303
- 5 月 23 日 AM1+2 > A-CC31：氷床・氷河コアと古環境変動 104
- 5 月 23 日 AM1+2 > H-GM02：Geomorphology 301A
- 5 月 23 日 AM1～PM1 > H-SC24：人間環境と災害リスク 102B
- 5 月 23 日 PM2 + 5 月 24 日 AM1～PM2 > A-PE33：古気候・古海洋変動 103
- 5 月 24 日 PM2 > B-PT24：人類進化と気候変動 203
- 5 月 24 日 PM2 > S-TT58：磁気層序・微化石層序ー高精度年代法に向けて 多目的ルーム
- 5 月 24 日 PM2 > H-QR22：平野地域の第四紀層序と地質構造 101A
- 5 月 25 日 AM1～PM1 > H-QR23：ヒトー環境系の時系列ダイナミクス 303

ポスターセッションは、オーラルセッションと同日、幕張メッセコンベンションホールで開催されます。ポスターは当日終日掲示され、指定された時間帯に説明が行われます。

●第四紀学会単独・主催セッション

3 月 19 日現在での暫定的な発表リストです。紙面節約のため筆頭発表者のみ記されています。今回からオーラルセッションで、ポスター 1 件につき 3 分間の口頭説明が行われます（希望者のみ）。発表順等の詳細プログラムは、セッションごとに編成中です。確定したプログラムは追って大会ウェブサイトを確認できます。

H-QR23 『ヒトー環境系の時系列ダイナミクス』オーラルセッション

5 月 25 日（金）9:00～15:15 幕張メッセ国際会議場 303

【注】これらのうち 3 件は、ポスター発表及び口頭説明となります。

- 1 小荒井衛他：中越地域における地震による活褶曲の成長と斜面変動
- 2 植木岳雪他：関東平野南部の東京都世田谷区、府中市で掘削されたボーリングコアの古地磁気層序
- 3 船引彩子他：東京都世田谷区および府中市で掘削された上総層群ボーリングコアの堆積相と堆積物物性
- 4 小野 昭：ヒトー環境系の相互関係と先史時代人類誌の枠組み
- 5 工藤雄一郎：MIS3 後半期の環境史と後期旧石器時代前半期の遺跡群の年代
- 6 島田和高：中部高地黒曜石資源の開発と最古の黒曜石利用
- 7 遠藤邦彦：カザフスタン、バルハシ湖の湖底堆積物に記録された完新世のドラスティックな環境変動
- 8 須貝俊彦他：バルハシ湖流入諸河川の完新世における同期的河床変動と古気候変動

- 9 大西健夫他：イリーバルハシ流域の水文循環に及ぼす人間活動の影響評価
- 10 原口 強他：カンボジア・トンレサップ湖で発見された埋没地下河川
- 11 松永光平：歴史時代における中国黄土高原の土壌侵食
- 12 中村俊夫他：能登半島富山湾岸に位置する真脇遺跡から出土した柱状木柱列の ^{14}C 年代による編年
- 13 山田和芳他：南九州、蘭牟田池ボーリングコア試料の高度年代軸の確立
- 14 鈴木毅彦他：下北半島東方沖「ちきゅう」C9001 コア中の中期更新世テフラ層序とその陸域への応用
- 15 笠原天生他：郡山盆地地下における中期更新世降下テフラと火砕流堆積物の層序
- 16 仲村祐哉他：上越沖海底コアに挟在する 31 枚の後期更新世テフラの噴出年代
- 17 千葉 崇他：印旛沼地域における完新世の海水準変動
- 18 丹羽雄一他：完新世相対的海面変化の空間的差異から認定される濃尾傾動運動

H-QR23 『ヒト—環境系の時系列ダイナミクス』ポスターセッション

5月25日(金) 幕張メッセコンベンションホール

- 1 前杵英明他：後氷期グリーンランド氷床融解史と先史グリーンランド文化
- 2 佐藤明夫他：カザフスタン、サライシクコトラウ沙漠における更新世末期以降の砂丘地形発達
- 3 清水 整他：完新世後期のカザフスタン・イリ川中流域河成地形面の編年と流域の気候変動との関係
- 4 門谷弘基他：中央アジア、バルハシ湖湖底堆積物の鉍物分析と音波探査解析により復元された完新世の湖水位変動
- 5 中澤文男他：垂節レベルでの同定を目的としたペルーハ氷河中のマツ属花粉 1 粒ずつの DNA 分析
- 6 南雲直子他：メコン川下流域におけるセン川の動態と地形発達過程
- 7 山田和芳他：カンボジア・トンレサップ湖の形成時期と堆積環境変化—埋没河川最深部のボーリングコアによる検討—
- 8 桂田祐介：ヨルダン南部、ジャフル盆地における新石器時代の水利施設遺跡群とその周辺環境
- 9 宮入陽介他：始良 Tn (AT) 火山灰の ^{14}C 年代の手法間比較
- 10 近藤玲介他：pIRIR 年代測定法を用いた最終間氷期以前に形成された海成・河成段丘編年の試み：北海道北部および南部を事例に
- 11 小室祐介他：OSL・pIRIR 年代測定法を用いた関東平野における後期更新世ローム層と地形面編年
- 12 石村大輔：テフラ分析に基づく近江盆地の段丘編年とその形成過程
- 13 坂本優紀他：日本の山間河川における最終氷期以降の河床縦断面形変化の地域特性
- 14 野口真利江他：珪藻分析による東京湾臨海地区・お台場青梅で掘削された AD コアにおけるイベント堆積物の検討
- 15 若山大樹他：千葉県浦安市の液状化発地点における地下浅層地質の検討
- 16 吉田 剛他：千葉県九十九里浜におけるメタンガスの湧出する潮溜まりの白濁現象とその地質環境

H-QR22 『平野地域の第四紀層序と地質構造』オーラルセッション

5月24日(木) 15:30～17:00 幕張メッセ国際会議場 101A

【注】これらのうち数件は、ポスター発表及び口頭説明となります。

- 1 浜田昌明他：能登半島北部における火山灰層準からみた海成段丘の形成年代
- 2 小松原純子他：ボーリングによる勇払平野沿岸の活構造調査
- 3 石原武志他：荒川・妻沼低地と中川・渡良瀬低地における沖積層とその基底地形
- 4 卜部厚志：関東地方内陸部、潮来市日ノ出地区における表層地盤構成と液状化の発生深度の検討
- 5 山田圭太郎他：再軟弱化した中期更新統の発見とその原因
- 6 内田康人他：音波探査で見いだされた厚岸湾・厚岸湖（北海道東部）の潮汐三角州の内部構造と埋没カキ礁の分布
- 7 稲崎富士：オールコアボーリングコア試料中の液状化層の同定と内部変形構造把握
- 8 船引彩子：ベトナム北部、紅河デルタにおける氾濫原の形成と開発
- 9 木村克己他：ボーリングデータベースの解析による警固断層と福岡平野の地下地質構造
- 10 納谷友規他：関東平野中央部 1505m 温泉井の年代層序
- 11 北田奈緒子他：和歌山平野の表層地盤構造

H-QR22 『平野地域の第四紀層序と地質構造』ポスターセッション

5月24日(木) 幕張メッセコンベンションホール

- 1 石原与四郎他：地盤情報データベースを用いた宮崎平野の沖積層の 3 次元モデル

- 2 新井悠介：印旛沼南部地域における MIS5e 期の海成段丘
- 3 稲崎富士：幕張海浜公園における統合的液状化調査
- 4 葛西未央他：青森県十三湖における完新世中期以降の地形環境変遷

S-SS35 『活断層と古地震』 オーラルセッション

5月22日(火) 9:00～15:15 幕張メッセ国際会議場 303

【注】これらのうち数件は、ポスター発表及び口頭説明となります。

- 1 堤 浩之他：フィリピン断層から発生する地震の地域的多様性—大地震からクリープ変位まで—
- 2 林 愛明他：2008年四川大地震の地表地震断層の長さとお青川断層沿いの地震断層
- 3 杉山雄一他：福井県・浦底断層の完新世活動
- 4 安藤広一他：コンピュータシミュレーションを用いた1999年台湾 ChiChi 地震で出現した地震断層の基盤断層角の推定
- 5 神田克久他：東海地域で発生した歴史的なスラブ内地震の地震規模
- 6 吾妻 崇他：「孤立した短い活断層」と地下の断層構造
- 7 奥野真行他：三重県内の文献史料からみた明応七年(1498年)の地震による安濃津の被害
- 8 野村俊一他：活動データの不確定性を考慮した BPT 分布更新過程のベイズ型予測
- 9 竹村恵二他：上町断層による変形構造について
- 10 岡本敏郎他：日本における活断層法適用の課題と対策
- 11 佐藤比呂志他：震源断層モデルの構築に向けて
- 12 近藤久雄他：上町断層帯の詳細位置・形状に関する地形・地質学的調査
- 13 村上雅紀他：断層の新しい年代評価法を目的とした断層破碎物質色彩分析の試み
- 14 大谷具幸他：2011年4月11日福島県浜通りの地震で地表に現れたすべり面と断層破碎帯における元素分布の関係
- 15 加瀬祐子他：地形・地質学的情報に基づく強震動予測のための動力学的震源モデル
- 16 越谷 信他：北上低地帯西縁断層帯北部の浅部地質構造
- 17 岡田知己他：東北地方太平洋沖地震発生後の内陸地震活動とその意味
- 18 阿部信太郎他：郷村断層帯海域延長部における断層分布と活動性について
- 19 鈴木康弘他：遠州灘・熊野灘撓曲およびその周辺の変動地形に関する考察
- 20 小形祐美他：白神山地西縁、西津軽沿岸の波状隆起をもたらす震源断層の推定
- 21 遠藤香織他：新しい相模トラフ沿いの海溝型地震像—房総半島完新世離水海岸地形の高度と離水年代の新知見から
- 22 楮原京子他：函館平野西縁断層帯海域延長部における古地震調査
- 23 宮田隆夫他：神戸市三宮海岸通り周辺の伏在断層調査への地中レーダ・地層分布不連続解析の適用
- 24 奥村晃史他：ヒマラヤ前縁帯カングラ—ダラムサラ地域の活構造と古地震
- 25 KHAN AFZAL 他：Evidence of Late Holocene subsidence and tsunami deposit from west coast of Andaman Island, Andaman and Nicobar Islands

S-SS35 『活断層と古地震』 ポスターセッション

5月22日(火) 幕張メッセコンベンションホール

- 1 石村大輔：段丘地形と地下地質情報に基づく第四紀後期の伊勢湾から近江盆地の地殻変動
- 2 小松原琢：京都盆地東縁南部の活傾動
- 3 吉岡敏和：阿寺断層系、佐見断層および白川断層の活動履歴
- 4 杉山雄一他：敦賀湾における浦底断層のコアリング調査
- 5 Yan Bing 他：Systematical deflections and offsets of the Yangtze River drainages along the Xianshuihe Fault, Tibetan Plateau
- 6 Wiwegwin Weerachat 他：Paleoearthquake Investigations of the Mae Hong Son Fault in Mae Hong Son, northern Thailand
- 7 宇田俊秋他：個別要素法を用いた呉羽丘陵形成の数値モデリング
- 8 井上直人他：モデルおよび重力変化からみた上町断層と大阪盆地縁断層との関係
- 9 坂本 泉他：敦賀湾における浦底断層の高分解能地層探査
- 10 池田倫治他：中央構造線活断層帯川上断層の東延長のボーリング調査
- 11 石山達也他：御殿場地域における浅層反射法地震探査(小山測線)
- 12 佐藤比呂志他：東北地方の震源断層モデル
- 13 小坂英輝他：奥羽脊梁山脈東麓の構造発達とセグメント区分
- 14 楠本成寿他：基盤岩から厚い堆積層内部に達する断層の運動による堆積層の変形：個別要素法に基づく数値シミュレーション
- 15 野原 壯他：北海道北部幌延丘陵の堆積環境と断層関連褶曲の変遷についての検討
- 16 丸山 正他：富山県西部、砺波平野断層帯(西部)の完新世の活動

- 17 宮下由香里他：山口県岩国断層帯大竹断層および甘木峠断層のトレンチ調査
- 18 北田奈緒子他：JR 難波駅付近で実施した UMH22-1 コアの層序と上町断層
- 19 戸田 茂他：近畿トライアングル北部、三方断層に伴う袋状埋積谷における反射法地震探査
- 20 岩田知孝他：上町断層帯における重点的な調査観測について (2)
- 21 木村治夫他：3 次元バランス法解析によって推定した上町断層帯の深部形状
- 22 井上直人他：鳥取県西部地震震源域における稠密重力探査
- 23 水本匡起他：鈴鹿西縁断層帯における後期更新世以降の断層活動ー反射法地震探査結果と微小な変位地形の整合性の検討ー
- 24 中村 克他：野島断層における断層破碎帯の分布とその産状
- 25 松多信尚他：地震前後の空中写真測量による地表地震断層の変位量計測と更新世後期の変位地形計測の手法開発 台湾車龍埔断層を例にして
- 26 黒澤英樹他：兵庫県の山崎断層帯安富断層における断層破碎帯と変動地形の関係
- 27 田力正好他：弥栄断層帯の断層変位地形ー中国地方西部の活断層密集地域に分布する断層長の長い活断層
- 28 栗田泰夫他：真昼山地南東縁に位置する割倉山断層の活動性と古地震履歴
- 29 宮下由香里他：福岡県西山断層帯の活動履歴：飯塚市潤野トレンチ調査速報
- 30 佐藤ふみ他：京都府京丹後市の郷村断層沿いに見いだされた断層露頭

S-TT58 『磁気層序・微化石層序ー高精度年代法に向けて』 オーラルセッション

5月24日(木) 15:30～17:00 幕張メッセ国際会議場 多目的ルーム

- 1 畠山唯達他：考古地磁気学データが示す日本の地磁気永年変化
- 2 林田 明 (招待)：琵琶湖の湖底堆積物の高精度磁気層序
- 3 小田啓邦他：ブルーンー松山地磁気逆転境界の年代値：古地磁気記録・天文年代更正・放射年代測定
の信頼性
- 4 林 辰弥他：鮮新世北大西洋堆積物の年代決定に関わる新手法
- 5 千代延俊他 (招待)：北大西洋と北西太平洋間の石灰質ナノ化石層序の同時性
- 6 山崎 誠他：北大西洋 IODP Site U1304 の浮遊性有孔虫化石に基づく亜極前線下に発達する珪藻軟泥の古海洋学的意義
- 7 加藤茂弘他：東アフリカ、エチオピア地溝帯南部に分布する鮮新～更新統コンソ層の古地磁気層序

S-TT58 『磁気層序・微化石層序ー高精度年代法に向けて』 ポスターセッション

5月24日(木) 幕張メッセコンベンションホール

- 1 登日真里奈他：北極海チュクチライズ海底堆積物コアの磁気層序に関する予察的研究
- 2 兵頭政幸：地磁気極性境界を特徴づける
- 3 小田啓邦他：掘削残留磁化に汚染された堆積物の古地磁気層序：IODP Exp.322 を例にとって

◆ 2011 年度学術賞受賞者講演会（第 1 回）・シンポジウム報告

大久保茂子（奈良教育大学）

2012 年 1 月 21 日、奈良女子大学において日本第四紀学会 2011 年度学術賞受賞者講演会・シンポジウムが開催された。参加者は約 70 名であった。

学術賞受賞者講演「堆積物と地形から読み取る完新世の海水準変動に関する研究」では、前田保夫会員の多くの業績のうち、特にフィリピン全土に分布するノッチの面的調査から得られた完新世の海水準変動について、具体的なデータや写真なども交えながら、わかりやすく紹介していただいた。研究成果の紹介とともに、長年の野外調査のノウハウにも触れていただいたので、研究者にとって学ぶことの多い内容だったように思う。

つづくシンポジウム『ヒトと自然の相互関係を読む：縄文時代から古代まで』では、4 件の講演があった。小野副会長が闊達な論議の期待できる内容だと挨拶されたとおり、講演内容やパワーポイントに映し出される数々のデータは、興味を駆り立てられる貴重なものであった。

まず、金原正明氏による「縄文・弥生の二次林と古墳・古代の二次林」では、縄文時代から古代まで、とくに二次林植生の変化は農耕の変化と連動し、社会構造などとも有機的に繋がっていたことが紹介された。

つづく丸山真史氏による「先史時代の動物利用の変化とその意義：奈良盆地・大阪平野を中心に」では、奈良盆地の遺跡から出土する海水魚の骨が、大阪平野と奈良盆地との間の水産物交易や縄文中期以来の漁撈活動の活発化を反映していると考えられることが紹介された。また水田農耕の開始に伴い、大型野生獣の捕獲への集中が起こることや、



前田保夫会員による学術賞受賞者講演会の講演風景

人間の生活の場と野生獣の行動範囲が重複することでヒトと野生動物との新しい関係が成立すること、などについても、具体的な事例を交えた話があった。

休憩後の光石鳴巳氏による「奈良盆地南部における水田経営の開始と自然環境（橿原市萩之本遺跡を中心に）」では、良好な保存状態にある弥生時代前期水田跡の検出を自然科学的分析の視点を交えて捉える試みについての講演があった。そしてそれらの結果から、弥生時代の奈良盆地では、居住域や生産域における人為的な植生破壊と二次林・草地の拡大が起こったと推定できることなどが紹介された。

シンポジウムの最後は、松田真一氏による「奈良盆地における定住社会の生業戦略」であった。松田氏によると、縄文時代の奈良盆地では、初期の頃から盆地全体に小世帯からなる集落が形成され、近年のクリ埋没林の発掘などからもわかるように、利用価値の高い植物を生育させるため、生態系の一部を改変・管理し、地域に適応していたと考えられることなどが紹介された。

時間の関係から各々の講演を総合した十分な議論が展開されるまでには至らなかった感はあるが、個人的には、今回のような『ヒトと自然の相互関係』についての議論の場が、今後も引き続き提供されることを期待したいと感じさせるシンポジウムであったように思う。末筆ながら、講演者および会場校の皆さまに厚くお礼申し上げます。



シンポジウム『ヒトと自然の相互関係を読む：縄文時代から古代まで』における講演風景

◆市民向けイベント「新たな視点で東四国の自然の価値を発見しよう」の報告

植木岳雪（産業技術総合研究所）

2011年8月の徳島大会にあわせて、市民向けの東四国の地形・地質を対象としたアウトリーチ巡検が行われました。今回は、音楽、芸術、食べ物、ツーリズムなどの身近なものから東四国の自然の価値を発見してもらうことを目的として、2012年2月4日（土）に野外巡検、2月5日（日）にミニ講演会とコンサートをを行いました。これらの活動は、文部科学省の科学研究費補助金（研究成果公開促進費）の補助を受けたからこそできたので、今後も外部資金の獲得に積極的に挑戦することが重要だと思います。

従来の巡検や講演会のイメージは、地学に興味を持った児童・生徒・市民が参加して、地形・地質を観察したり、地形・地質の学術的な成果を聞くというものですが、今回は、地学に特に興味がない市民が身近な自然の価値を再発見するような活動を企画しました。これは、学会ができる生涯教育・生涯学習の一環として、ジオパークや新しいツーリズムにつながるものです。昨年には、教育・アウトリーチ委員会も立ち上がりました。今後の第四紀学会による教育・アウトリーチ活動にご期待下さい。

以下に、2月4日（土）の野外巡検、2月5日（日）のミニ講演会とコンサートの様子を報告いたします。

●野外巡検「新たな視点で東四国の自然の価値を発見しよう」

西山賢一（徳島大学）

2012年2月4日（土）に、日本第四紀学会と徳島県立博物館の共催による見学会「新たな視点で東四国の自然の価値を発見しよう」が実施されました。対象は小学生高学年以上の一般市民としました。参加者は、案内者を含めて16名で、下は小学生から上は年配の方まで、幅広い年齢層の参加がありました。



駅まで15分も山道を歩かないと着かない「秘境駅」として有名なJR土讃線の坪尻駅。かつて100万年前より前には、吉野川がこの付近を流れて、瀬戸内海方面に流れていた。

参加者を乗せたバスは、中央構造線に沿って吉野川を上流へさかのぼり、小雪の舞う阿讃山地を越えて香川県内に入りました。香川県三豊市の「橋村製麺所」にて、まずは本場の讃岐うどんを味わいました。おいしい讃岐うどん店が立地する地域の地形・地質的な条件を踏まえながら、みんなで腹ごしらえを済ませました。その後、阿讃山地の秘境駅「坪尻駅」に向かいました。徒歩でしかアプローチできないこの秘境駅に向け、積雪を踏みしめながら山道を15分下って駅にたどり着きました。ここからJR土讃線の汽車に乗り、中央構造線の断層地形を観察しながら、吉野川低地にある佃駅まで、車窓からの「ジオ鉄」（鉄道を利用したジオツアー）を楽しみました。バスに戻って再び阿讃山地を越え、香川県坂出市の「けいの里」を訪問しました。サヌカイトの原石が点在する山麓緩斜面を散策したあとで、サヌカイトの楽器に触れました。サヌカイトの美しい音色は、翌日の博物館でのコンサートでも披露されました。次に、高松市牟礼にある「イサム・ノグチ庭園美術館」に向かいました。晩年を、花崗岩の高級石材として知られる「庵治石」の産地である牟礼につくったアトリエで制作に打ち込んだ、世界的な彫刻家の作品と庭園を見学しました。その後、徳島の吉野川流域に戻り、吉野川にかかる阿波中央橋の欄干に設置されているイサム・ノグチの彫刻を車窓から眺めながら、環境省による日本の名水100選に選ばれた「江川の湧水」を見学しました。この湧水は、水温が夏に10℃程度と低いのに、冬に20℃程度と高くなる「異常水温現象」で有名です。みんなで生暖かい湧水に触れて、温度を実感しました。最後はバスで徳島市内に戻り、徳島市のシンボルとも言える眉山の山麓にある「眉山湧水群」の2箇所を見学しました。江戸時代から愛用されてきた湧水が多いのですが、戦後は湧水が枯れたところが多く、現在の湧水は、岩盤をボーリング掘削して得られた場所も多いようです。都市近郊の名水を今後に残していく重要性を考えながら、徳島駅に戻って解散しました。

2011年8月に実施した「アウトリーチ巡検」では、中央構造線と吉野川低地を構成する第四系に関する専門的な巡検となりましたが、今回の巡検は一転して、讃岐うどん、秘境駅と「ジオ鉄」、サヌカイトの楽器と花崗岩の彫刻、そして名水の見学という、バラエティに富んだ内容となりました。普通の市民にとって、身近にありながら学ぶことの少ない地形・地質が、地域の水環境や食文化、さらには芸術まで含めた幅広い分野のベースになる知識であることを実感していただけたのではないかと思います。ご参加いただいた市民の皆様、ならびに案内者の皆様に、この場をお借りしてお礼申し上げます。

●「ミニ講演会と石の楽器のコンサート」

中尾賢一（徳島県立博物館）

2012年2月5日(日)に「新たな視点で東四国の自然の価値を発見しよう」と題するミニ講演会とサヌカイト楽器によるコンサートが日本第四紀学会と徳島県立博物館(以下、博物館)の共催により実施されました。

ミニ講演会では、午前中に4タイトル、午後5タイトルの講演がありました。タイトルと講演者(以下、敬称略)は以下の通りです。1. 四国の自然の楽しみ方: 植木岳雪(産業技術総合研究所)、2. ジオパークのすすめ: 柴田伊廣(室戸ジオパーク)、3. 四国の自然をジオ鉄で楽しむ: 横山俊治(高知大学)、4. 中学生による徳島の自然の紹介: 森江孝志+徳島県那賀町立相生中学校の生徒、5. おいしい讃岐うどんは地殻変動の賜物?: 長谷川修一(香川大学)、6. 湧水の楽しみ: 江川湧水と眉山湧水群: 山本勝博(茨城大学)、7. 石の楽器(サヌカイト)ができるまで: 前田宗一(株式会社興仁)、8. 文化遺産・産業遺産としての讃州豊島石の魅力: 西山賢一(徳島大学)、9. 高校生による香川の自然の紹介: 猪熊真次+香川県立観音寺第一高等学校の生徒。

ミニ講演会はそれぞれ15~20分間と短く、全体的に非常にバラエティに富んだ内容でした。それぞれの講演終了後に活発な質疑応答がみられたこともあり、参加者の興味は十分引きつけたように思われました。84名の参加者がありました。

石の楽器のコンサートは、午前と午後COLON & 前田宗一および臼杵美智代(くらしき作陽大学)の2グループによる演奏が交互に行われました。

サヌカイトを使った楽器という面ではそれぞれ共通するものの、全く違う作り方をした楽器であり、それぞれの長所を生かした演奏を味わうことができました。目につきやすい博物館の常設展示室入口で行ったため、ミニ講演会以上の参加者数がありました。

博物館では自前で実施することが難しい内容であり、その意味でも意義があったかと思われます。最後になりましたが、興味深い講演を行っていただいた講演者のみなさんに厚くお礼申し上げます。



石の楽器(サヌカイト)のコンサート。サヌカイトは約1,400万年前に瀬戸内地方で噴出した溶岩。演奏者はCOLON。

◆研究委員会総括報告

2008年2月から活動を開始した5つの研究委員会は、2012年1月の評議員会までで終了となりました。各研究委員会の4年間の総括報告を以下に掲載します。

1. “地球温暖化問題”を検討する研究委員会(代表者: 陶野郁雄)

地球温暖化に対して国内外で関心が高くなり、地球の将来に懸念を抱く人が多くなっている。特に、温暖化をもたらす最大の原因となっている二酸化炭素(CO₂)をどの程度削減するかが国際的な大問題となっている。しかし、2011年に開催されたCOP17においても世界第1-2位の二酸化炭素排出国のアメリカと中国がその削減に消極的なことや、それ以外の国の思惑が異なっていることもあり、なかなか前進していかないのが実情である。

地球温暖化は世界的な関心事となっていることから国連機関IPCCにおいて継続的に検討され、2007年11月には『気候変動に関する政府間パネル(IPCC)第4次評価報告書』が合意公開されている。このIPCC第4次評価報告書では社会環境によって6つの温室効果ガスの排出シナリオを想定して、21世紀末における気温の昇温を推定および海面水位上昇の予測を行っている。

現在、地球温暖化によって生じる、(1)異常気象や気候異変と呼ばれる現象を専門的な立場から捉えること、(2)現在進行しつつある海面上昇について過去の事例から見通しをたてること、(3)アジア内陸部をはじめ世界的に重要な水資源となっている山岳氷河の急速な後退と予想される深刻な水問題を捉えること、(4)温暖化の下で進行する沙漠化や乾燥・半乾燥地域の環境悪化やダストの増大を科学的な手法で示すこと、(5)海水温の上昇や気温上昇に基づく多様な生物の変化の兆候を捉えること、(6)海面上昇によってもたらされる低地部・島嶼部の土地条件の悪化や災害に対する脆弱化を検討すること、など多くの課題が存在する。これら身近に存在する多くの現象が気候変化とどのような時間差とメカニズムで応答するのか、過去から現在に至る長い時間スケールで環境変遷を捉えてきた第四紀研究者の目から地球温暖化問題を捉えなおし、より長期的な視野から社会に対して地球温暖化の真の理解とあるべき対策を近い将来に提案することが必要になっていると考え、日本第四紀学会では2008年2月から4年間“地球温暖化問題”を検討する研究委員会を発足させた。まず、陶野郁雄のほか、遠藤邦彦(日本大学)、青木賢人(金沢大学)、足立敏之(国土交通省)、磯望(西南学院大学)、海津正倫(名

古屋大学)、菅 浩伸(岡山大学)、菊地隆男(立正大学)、久保純子(早稲田大学)、小池裕子(九州大学)、木幡邦男(国立環境研究所)、斎藤文紀(産業技術総合研究所)、相馬秀廣(奈良女子大学)、中村裕昭(地域環境研究所)、西垣 誠(岡山大学)、細野 衛(東京自然史研究機構)、山川修治(日本大学)の17名で発足した。途中で足立、菊地、木幡、細野の4名が委員を退き、新たに大里重人(土質リサーチ)、鈴木正章(道都大学)、高原光(京都府立大学)、日野剛徳(佐賀大学)、藤田士郎(国土交通省)、山野博哉(国立環境研究所)、吉田 隆(気象庁)、渡邊真紀子(首都大学東京)、Richard W. Jordan(山形大学)の9名が加わった。

当委員会は主に委員間の情報交換とフォーラムなどの広報活動を行うことにした。

また、気温の昇温に代表される気候変動は、年間総降水量や連続降水量や渇水等の降水特性に大きく影響する可能性がある。これら降水特性の変化や海面水位上昇は、斜面崩壊・洪水・液状化・ゼロメートル地帯創出拡大等々の地盤災害の発生リスクや水循環系における地下水環境等に少なからず影響を及ぼすことが懸念される。そこで、公益社団法人 地盤工学会においても2010年4月から3年間「地球温暖化が地盤環境に及ぼす影響と対策に関する研究委員会」を発足させた。この委員会の委員12名の内、陶野(委員長)のほか、遠藤、大里、中村、西垣、日野の6名が共通の委員であることもあり、以後互いに協力し合って活動を行うことにした。

開催したフォーラム、シンポジウム等は以下のとおりである。

- (1) 地球温暖化フォーラム2008ー氷河の変遷から起こりうる温暖化現象の将来変化を探るー
2008年7月12日、日本大学文理学部、共同主催：日本大学文理学部、後援：環境省、国土交通省、気象庁、(独)国立環境研究所、(社)土木学会、(社)地盤工学会、日本地理学会災害対応委員会
- (2) シンポジウム「地球温暖化と環境防災」
2009年6月27日、日本大学文理学部
- (3) シンポジウム「生物多様性からみた地球温暖化」
2009年12月19日、九州大学21世紀プラザ、共同主催：九州大学GCOE「自然共生社会を拓くアジア保全生態学」
- (4) 地球温暖化問題研究3機関技術交流会
2011年6月9日、日本大学文理学部、共同主催：(公益社団法人)地盤工学会 地球温暖化が地盤環境に及ぼす影響と対策に関する研究委員会、共催：環境省環境研究プロジェクトS-8

2. 古気候変動研究委員会(代表者：公文富士夫)

地球温暖化問題を検討する研究委員会、テフラ研究委員会などと協力して、新学術領域として「近未来の環境変動予測を確実にするための古気候・環境情報の統合と展開」を2年間にわたって申請したが、採択には至らなかった。

学術的成果と人的な交流場として後述するような研究集会、ワークショップ等の開催を行っ

た。また、PAGES国内委員会などと協力し、各種の国際的共同研究プロジェクトと関係したワークショップ等への参加を促した。2009年地惑連合大会での気候変動をテーマとしたユニオンセッション、PAGES Asian 2K Workshop in Japan(2010年8月26～27日、名古屋大)、PIMS3ワークショップ(2010年12月4～10日、京都)、IGCP-581 Evolution of Asian River Systems: Tectonics and Climates(2011年6月11～14日、北海道大)などが開催され、古気候研究者の交流が大きく前進した。本研究委員会が主催したものはないが、第四紀学会2008年大会(東京大学)の際にシンポジウム「第四紀後期の気候変動と地球システムの挙動ーその原因とメカニズムー」が開催され、第四紀後期の気候変動に関わる最新の研究成果が紹介された。そこでの講演は第四紀研究48巻3号(2009年6月刊行)としてまとめられ、古気候変動研究のレベルアップと活性化に大きく貢献するものとなった。

4年間のまとめとしては、古気候変動研究委員会としての組織だった取り組みという点では不十分さを残したが、古気候、気候変動に関わる研究者の交流を促し、研究集会やシンポジウムなどを通じて学術情報の共有化を図るという点では一定の成果をあげたものと考えられる。

<研究集会等の開催>

- ・研究集会「近未来の環境変動予測を確実にするための古気候・環境情報の統合と展開」
2008年7月13日 日大文理学部百年記念館
10件の講演 48名
- ・シンポジウム「氷床変動とグローバルな気候変動」
2008年10月3日 東大工学部2号館 4件の講演(ランベック教授来日記念)
- ・「第四紀中・後期の年代的枠組みを理解するためのワークショップ」
2008年12月25～26日 信州大学理学部
14件の講演 約50名
- ・研究集会「中部日本における更新世中・後期の編年と環境変動」
2010年5月1日 信州大学理学部大会議室
研究発表3件 17名
5月2日 現地見学会 八ヶ岳東南麓の中部更新統 12名

3. 「東アジアにおける酸素同位体ステージ3の環境変動と考古学」研究委員会(代表者：小野 昭)

2006年の日本第四紀学会創立50周年大会のシンポジウムにおける議論、翌2007年のつくば市の産業技術総合研究所で開催された日本第四紀学会創立50周年記念国際シンポジウムにおけるセッション(Environmental Changes and Human Occupation in North and East Asia during OIS3 and OIS2)の議論がこの委員会結成の契機となり、2007年12月に日本第四紀学会幹事会に申請し、翌2008年2月の評議員会で正式に承認され、活動を開始した。

■ヨーロッパを中心に議論されてきたこの時期の資料的な前提、研究の問題意識、論点を明らかにし、

それをふまえて東アジア、日本列島における当該期の環境変動と考古学がかかえる問題の解明を試みることを研究委員会の目的とした。

提案者 17 名（考古学：出穂雅実・小田静夫・小野 昭・加藤博文・工藤雄一郎・佐藤宏之・島田和高・諏訪 順・堤 隆・比田井民子・山岡拓也、人類学：海部陽介、気候変動：公文富士夫、火山灰編年学：鈴木毅彦、地形学：久保純子、花粉学：叶内敦子、哺乳動物化石：高橋啓一）で、筆者が代表をつとめることとなった。

■具体的には、ステージ 3 の中頃以降の人類の生活痕跡の追究、年代論、東北アジアの同時期の遺跡との関係など、基礎的な論点を環境変動との関連において考古学、人類学の問題解明を進めることを計画し、東北アジア地域の当該期の解明を第四紀学的な観点を強化して日本、韓国、中国、ロシアの研究者と連携をとりながら進めることにした。

具体的な研究集会の取り組みは以下の通りである。
準備会 2007 年 7 月 21 日・22 日 準備会開催
メンバー 7 人が話題提供（首都大学東京で開催）。二日目は発掘中の杉並区「堂の下遺跡」資料の見学。

第 1 回 2007 年 10 月 13 日 メンバー 3 人が話題提供（首都大学東京で開催）。ここまでは「酸素同位体ステージ 3 の考古学」として開催した。その後日本第四紀学会会長他から研究委員会の申請に当たっては、テーマの重要性に鑑み、「環境変動」についても取り込んで、関連分野の研究者も含めて進めてほしいとの希望もあり、文頭に記した名称とした。

第 2 回 2008 年 6 月 21 日・22 日 「日本列島の旧石器時代遺跡—その分布・年代・環境—」（首都大学東京で開催）。日本旧石器学会と共催。後援を、日本学術会議 INQUA 国内委員会・INQUA Commission on Palaeoecology and Human Evolution から受け実施。ドイツから N. Conard, O. Jöris 氏、韓国から李起吉、張龍俊氏を招聘した。コメンテーターを含めメンバー 4 人が話題提供。

第 3 回 2009 年 2 月 7 日 「東アジアへの新人の拡散と OIS3 の日本列島」（首都大学東京で開催）。メンバー 5 人が話題提供。

第 4 回 2010 年 6 月 5 日・6 日 「日本列島におけるステージ 3 の古環境と現代人的行動の起源」（浅間縄文ミュージアムで開催）八ヶ岳旧石器研究グループ、浅間縄文ミュージアムと共同主催。メンバー 10 人が話題提供。

■委員会として取り組んだ結果は、年代論と古環境の対応関係の話題が 6 本。段丘・地形面とテフラ、古植生、哺乳動物の話題が合わせて 6 本。人類の拡散に関連した古人類の問題と拡散ルート関連の年代が 4 本。考古学の遺跡関連の話題が 4 本。特徴的な遺物についての話題が 4 本。現代人的行動の抽出に関連する話題が 2 本。当該期の北ユーラシアと中部ヨーロッパの話題が 2 本である。

この 4 年間に国際第四紀学連合 INQUA のコミッション Humans and Biosphere (HaB) と積極的に連絡をとり、このコミッションの第 5 WG に本プロジェクトを関連づけた。また 2008 年の INQUA

プロジェクトに日本をふくむアジアから初めて申請し、ファンドを獲得した。これにより第 2 回目の研究集会に外国の若手研究者、日本の大学院生が参加しやすくするための補助など、研究促進のサポートもささやかながら実践した。

取り組みの成果は Quaternary International 誌に特集号 Palaeoenvironmental changes and human dispersals in North and East Asia during MIS3 and MIS2 を組み、このたび（248 号 2012 年）刊行された。またあわせて考古学界では世界的にサーキュレーションの良い British Archaeological Reports (B.A.R.) International Series にも 10 本の論集を Environmental changes and human occupation in East Asia during OIS3 and OIS2 のタイトルで組んだ。校正が終了し近く刊行される予定である。

なお本委員会の課題に即した、古海岸線復元・古地理図の作成の課題は取り組みができなかった一例である。しかし、全体としてはメンバーが本プロジェクトの課題に全力で取り組み、成果を関連の国際コミュニティーに発信した。今後の新たな展開の基礎を固めたといつてよいであろう。

4. テフラ・火山研究委員会（代表者：長岡信治 文責：鈴木毅彦）

テフラ・火山研究委員会は、INQUA International Focus Group on Tephrochronology and Volcanology (INTAV) (2007 年 INQUA 第 17 回ケアンズ大会以降、旧 Sub-Commission on Tephrochronology and Volcanism: SCOTAV を引き継いだ組織) の対応窓口となっている。2008 年 2 月以降も引き続き INTAV の対応窓口として、また、テフラに関する最新の研究成果を内外の研究者に紹介すると同時に交流の機会を与えること、国内のテフラに関する研究環境の整備や研究者間の問題意識の共有などを目的に活動を続けてきた。この間、以下の活動を行った。

〈2008 年度〉

2009 年 4 月に国際テフラ・火山研究委員会の会場および野外巡検予定地の下見を行った。2009 年 7 月に「ワークショップ：日本のテフラ研究—Active Tephra 2010 in Kyushu に向けて—」を首都大学東京にて開催した。

〈2009 年度〉

2010 年 1 月に「ワークショップ：日本のテフラ研究—自然史・人類史の高精度編年とテフラの役割、Active Tephra 2010 in Kyushu に向けて—」を日本大学文理学部にて開催した（参加者 28 名）。

INTAV の活動として国際野外集会 International Field Conference and Workshop on Tephrochronology, Volcanism and Human Activity: “Active Tephra in Kyushu, 2010” を 2010 年 5 月 9～17 日に九州において開催した（本会議は南九州霧島市、野外巡検は九州各地）。本会議へは 11 カ国から合計 76 名が参加し、49 件の口頭発表と 38 件のポスター発表がなされた。国際野外集会の詳細を第四紀通信に掲載した。

〈2010 年度〉

東京大学大気海洋研究所の共同利用研究集会と

して、2011年1月11～12日にシンポジウム「日本列島周辺域に分布するテフラのデータベース整備にむけて」（世話人：長岡信治・鈴木毅彦・青木かおり）を企画し、東京大学柏キャンパスにて開催した（参加者68名）。

〈2011年度〉

2010年5月に開催された“Active Tephra in Kyushu, 2010”に関する特集号として Quaternary International (Elsevier) 誌に “Enhancing tephrochronology and its application (INTREPID Project) : Hiroshi Machida commemorative volume” が企画され、国内から森脇 広（鹿児島大）と鈴木毅彦（首都大）が Editor として編集に携わった。本特集号は2011年12月に冊子 (Volume 246, Issues 1-2) として刊行され、35本（14本が日本人著者）の論文・記事等が掲載された。

2011年1月に開催されたシンポジウム「日本列島周辺域に分布するテフラのデータベース整備にむけて」のまとめを月刊地球（海洋出版株式会社）の特集号「テフロクロノロジーⅠ－火山・古環境・データベース構築－」（2011年12月）、「テフロクロノロジーⅡ－火山・古環境・データベース構築－」（2012年1月）として刊行した。

5. 古地震・ネオテクトニクス研究委員会（代表者：吾妻 崇）

本委員会は INQUA の Terrestrial Processes, Deposits and History (TEEPRO) の Focus Area “Paleoseismicity and Active Tectonics” に対する国内活動を推進することを主な目的として設置された。主な活動として、上記の Focus Area の活動への参加と国内への活動情報の提供を行ったほか、古地震およびネオテクトニクスに関する野外観察を中心とした研究集会を企画・実施した。

Focus Area “Paleoseismicity and Active Tectonics” では、世界各地における地震による諸事象の記録をデータベース化しその区分の体系化を目的とする計画 “A Global Catalogue of Earthquake Environmental Effects” が実施されてきた。当研究委

員会では、この計画に対して国内で近年発生した地震（2007年能登半島地震、2007年中越沖地震、2008年岩手・宮城内陸地震、2011年東北地方太平洋沖地震）を対象に事例研究を進めた。

また、Focus Area の活動と関連して、第33回 IGC オスロ大会における関連セッションとビジネスミーティングに奥村晃史会員と吾妻 崇会員が出席し、2009年2月にイスラエルの死海で開催された International Workshop and Field Trip “The Dead Sea Rift as a natural laboratory for earthquake behavior: prehistorical, historical and recent seismicity” に奥村晃史会員と太田陽子会員が参加した（「第四紀通信」第16巻2号に太田陽子会員による参加報告を掲載）。また、2011年7月の第18回 INQUA ベルン大会で開催されたビジネスミーティングに太田陽子会員と吾妻 崇会員が出席した。

国内においては、2008年岩手・宮城内陸地震の発生域および横手盆地東縁断層帯を対象として、2009年11月28日・29日に野外集会（参加者8名）を開催した（「第四紀通信」第17巻1号に佐々木俊法会員による参加報告を掲載）。また、野外集会開催に先立ち、2009年11月20日に都内で事前談話会（参加者21名）を実施し、今泉俊文会員（横手盆地の活断層について）、田力正好会員（河成段丘からみた奥羽山脈周辺の地殻変動について）、八木浩司会員（2008年岩手・宮城内陸地震に伴う斜面災害）に、それぞれ話題提供をして頂いた。また、両企画に関するホームページを開設・運営した。さらに、2011年東北地方太平洋沖地震発生後には、この地震による地殻変動や被害に関する情報を収集するとともに、同年7月に東京大学小柴ホールを会場として緊急シンポジウム「巨大地震を探る－第四紀学からのアプローチ」を開催した（参加者135名）。このシンポジウムでは、地震・津波研究の専門家による招待講演2件と会員による講演5件および総合討論を行った（「第四紀通信」第18巻5号に千葉 崇会員による参加報告を掲載）。

◆新研究委員会紹介

2012年1月の評議員会において、2012年1月からの4年間の活動期間内で、以下の4つの研究委員会の設置が承認されました。このうちの3つは前期から活動を続けていますが、次のステップとして新たな体制・目標で再スタートします。

1. 「最終氷期最盛期における北東アジアの生態系変遷と人類の応答」研究委員会

代表者：出穂雅実（首都大学東京）

活動目的：北東アジアにおける最終氷期最盛期 (LGM) の急激かつ短周期的な気候変動とそれに伴う生態系、特に動植物資源環境の変遷が、旧石器時代の人間活動とその文化形成にどのような影響を与えたのかについて、今日的な視点と分析から評価を与えることを目的とする。この目的を達

成するため、本研究では研究枠組みとして人類生態系アプローチを採用する。具体的な分析として、中緯度から高緯度の移行帯に位置する南シベリア、モンゴル東北部、および北海道の当該時期の発掘調査を実施し、遺物空間分布と石器製作技術等の考古学的分析から行動論的復元をおこなう。さらにこれらの考古学的分析結果を、放射性炭素年代及びテフラ編年による地質学的対比によって LGM の北東アジアの考古学・自然環境データと広く対比し、当該期の人類社会の変化プロセスと要因を明らかにする。

年次計画（予定）：

2011年度 本研究に関する研究の問題点を整理し、5年間の予定をたて、既存データベースの構築を開始する。

2012年度 引き続き問題点の整理と活動予定を具体化してゆく。考古学と人類学の既存研究成果をデータベース化する。夏期に北海道とモンゴルで野外調査をおこなう。秋期にロシアとモンゴルから研究者を招へいし、対象地域の比較検討のための基礎的課題を抽出する第1回会議を東京で開催する。

2013年度 古環境の既存研究成果をデータベース化する。夏期に北海道、モンゴルで野外調査をおこなう。秋期にロシアで野外調査をおこなう。冬期に第2回会議を東京で開催する。

2014年度 研究成果全体のとりまとめをおこなう。必要に応じて補足的な調査をおこなう。冬期に第3回会議を東京で開催する。

2015年度 INQUA 名古屋大会において本研究委員会が主催するセッションを実施する。会議後論文集を英文で出版する。

2. テフラ・火山研究委員会

代表者： 植木岳雪（産業技術総合研究所）

活動目的： INQUA International Focus Group on Tephrochronology and Volcanology (INTAV) に対応する日本第四紀学会の組織として、テフラ研究者が情報を交換し、研究を推進することを目的とする。そのために、野外巡検、公開シンポジウム、ワークショップなどを行う。また、日本のテフラデータベースの構築を進める。

年次計画（予定）：

2011年度 2012年度の野外巡検を伴う研究集会について、地域、時期などを検討する。

2012年度 野外巡検を伴う研究集会を行う。テフラデータベースの構築を進める。

2013年度 公開シンポジウムを行う。テフラデータベースの構築を進める。

2014年度 野外巡検を伴う研究集会を行う。INQUA 名古屋大会（2015年）に向けて、テフラ・火山に関するセッション、野外巡検を検討する。テフラデータベースの構築を進める。

2015年度 INQUA 名古屋大会（2015年）でテフラ・火山に関するセッション、ワークショップ、野外巡検を行う。

3. 古気候変動研究委員会

代表者： 公文富士夫（信州大学）

活動目的： 日本および東アジアを中心とした古気候変動の解明を進め、研究成果の交流をはかる。また、世界の古気候研究（PALCOM）との連携を

すすめる。以下に例示するような具体的な目標を掲げて、作業チームを編成して活動を進める。

- A. 5万年前から現在までの気候変動の高精度解析
- B. 中・後期更新世の気候変動情報の統合と編年
- C. 更新世のヒマラヤ・チベットの隆起活動と東アジア・モンスーン変動の解析

年次計画（予定）：

2011年度 目標Aに沿って、日本版の気候編年層序（JIS）作成のためのワークショップを開催し、作業を開始する。

2012年度 目標Aの中間まとめと目標Bの開始に向けたワークショップを開催する。試案を第四紀研究にノートとして投稿する。

2013年度 日本の更新世中・後期を通した気候編年案を作成し、その成果を中心とした研究発表を行う。成果をQSに投稿する。

2014年度 INQUA において開催する準備を進める。小規模なプレミーティングを開催する。

2015年度 INQUA 名古屋において東アジア地域の気候変動・編年に関わるセッションを開催する。その投稿論文を中心に研究成果を特集号としてIA誌に投稿する。

4. 古地震・ネオテクトニクス研究委員会

代表者： 藤原 治（産業技術総合研究所）

活動目的： INQUA の Terrestrial Processes, Deposits and History (TEEPRO) の Focus Area Group “Paleoseismology and Active Tectonics” に対する国内活動の推進を主な目的とする。

古地震や津波などの研究への社会的リテラシーの醸成や、関連諸分野との連携を深めるため、野外観察などを含めた研究集会を年に1～2回程度開催する。2015年 INQUA 名古屋大会にむけて、巡検およびセッション開催の準備を行う。

年次計画（予定）：

2011年度 静岡県磐田市の元島遺跡で野外集会を開催（6月上旬）。

2012年度 遠州灘沿岸（段丘地形、古地震を示す史跡）などで野外集会を開催。

2013年度 仙台周辺（津波跡など）、阿寺断層周辺（変動地形）、長野盆地（善光寺地震や水害遺構）で野外集会を開催。

2014年度 日本海沿岸（地震隆起と関係した完新世段丘；佐渡島、粟島、西津軽沿岸）などで野外集会を開催。

2015年度 2015年 INQUA 名古屋大会の巡検地下見を兼ねた野外集会（浜名湖周辺）。

◆ 2011 年度第 2 回評議員会議事録

日時：2012 年 1 月 21 日（土）11:00～12:45

場所：奈良女子大学 総合研究棟 S201 号室

出席者：遠藤邦彦（会長）、吾妻 崇、五十嵐八重子、池原 研、海津正倫、奥村晃史、小野 昭、久保純子、斎藤文紀、澤井祐紀、竹村恵二、陶野郁雄、長橋良隆、兵頭政幸、藤原 治、水野清秀、三田村宗樹、横山祐典（以上、評議員）、高田将志（幹事）、熊井久雄、町田 洋（以上、会長経験者）

幹事長の司会のもと、遠藤会長の挨拶に続き、議長に藤原 治評議員が選出された。定足数確認（出席 17 名、委任状 22 通）後、下記の報告と審議が行われた。

1. 2011 年度事業中間報告

各幹事より以下の報告がなされた。

1) 庶務：第 1 回評議員会を 8 月 26 日、鳴門教育大学で開催、総会を 8 月 27 日に鳴門教育大学で開催（第四紀通信で報告済み）、幹事会は 2011 年 8 月 26 日、10 月 23 日、12 月 25 日に開催した。第 2 回評議員会を 2012 年 1 月 21 日に奈良女子大学にて開催、第 3 回評議員会を地球惑星科学連合大会期間中（2012 年 5 月 20～25 日）に開催予定。2011 年度の会費請求時に、東日本大震災などの理由により会費の納入が困難な場合には、会費の減免申請ができる旨の連絡を行い、会費減免申請が 1 件あった（審議事項参照）。会員名簿作成のための会員情報、規約、年表などの掲載内容の確認を行った。東日本大震災にかかわる学会の取り組みをまとめ、学術会議事務局に提出した。第四紀研究の論文への転載許可申請 1 件、PDF ファイルの転載許可申請 2 件の対応を行い、承認した。シンポジウム等の共催 3 件、後援 5 件。2012 年学会賞選考委員候補者、論文賞選考委員候補者の評議員による投票を行い、それぞれ 5 名の当選者、次点者等を確定した。2012 年学会賞・学術賞受賞候補者の推薦、論文賞・奨励賞の受賞候補者・論文の推薦依頼を第四紀通信などに掲載した。

2) 編集：第四紀研究第 50 巻 5 号、6 号を刊行した。第 51 巻 1 号編集中。手持ち原稿 13 編。2011 年の投稿数は 25 編（特集号と雑録・書評を除く）。51 巻から印刷紙が変更となる（紙代はこれまでと同額）。2011 年度の編集委員会を 2 回（10 月 16 日と 12 月 10 日）開催した。改訂した投稿規定（2012 年から実施）に対応して、投稿時に提出する電子ファイルの形式を PDF ファイルとすることとした。学会 HP 掲載文書（投稿規定、執筆要項、送り状、保証書、著作権譲渡同意書）の差し替えと「投稿規定改定に伴う補足説明」の新規掲載を 2012 年に実施する。徳島大会特集号「環太平洋の環境文明史」は、13 編を予定、12 月上旬までに 12 編の論文が集まり、投稿準備中。学会賞と学術賞受賞記念論文は、2009 年度分 4 編を刊行済み、2010 年度分 4 編のうち 2 編は投稿済み、2011 年度分 4 編については投稿依頼済みである。編集書記の後任人事について、学会 HP で公募文書を公開した。

3) 行事：2011 年大会を 8 月 26 日～28 日に鳴門教育大学において開催した（第四紀通信にて報告済み）。2012 年大会の開催期間は 2012 年 8 月 20～22 日、開催場所は立正大学熊谷キャンパスに決定した。日程は 8 月 20 日に一般研究発表・評議員会、21 日に一般研究発表・総会・懇親会、22 日にシンポジウム（「南極氷床コア解析からの第四紀情報」を中心とするテーマを検討中）、23 日に巡検（「荒川流域」を中心に検討中）を計画している。

4) 企画：2012 年 1 月 21 日午後 2011 年度学術賞受賞者講演会（前田保夫会員）及びシンポジウム「ヒトと自然の相互関係を読む：縄文時代から古代まで」を開催する。

5) 広報：第四紀通信第 18 巻 5 号、6 号を編集し発行した。また第 19 巻 1 号を編集し、発行準備中。現在ホームページ用に無料で使用している国立情報学研究所のサーバが 2012 年 3 月末で閉鎖されるため、新しいサーバを検討し、民間のレンタルサーバを利用することにした。

6) 渉外：地球惑星科学連合では代議員選挙の結果、第四紀学会が推薦する 12 名が当選となった。次回大会は 2012 年 5 月 20～25 日（幕張メッセ）で、セッション提案については『ヒト－環境系の時系列ダイナミクス』を単独開催し、『活断層と古地震』、『平野地質－第四紀層序と地質構造－』を主催するほか、『ジオパーク』『人間環境と災害リスク』を共催し、ポスター発表 1 件に 3 分間のプレゼンタイムが口頭発表枠内に確保される予定となった。第 5 回地質の日事業推進委員会が開催され（11 月 2 日、産総研東京本部）、ポスター印刷・発送代などの費用にあてるため、学協会・個人へ寄付金（1 口 1 万円ほど）を募ることにした。自然史学会連合総会が開催され（12 月 17 日、中央大学）、加盟団体数 39、文科省の「博物館の設置及び運営上の望ましい基準」の一部改正案について意見書提出、講演会 2 回、共催 1 件、後援 1 件などの報告があった。京都国際地理学会議のセッション提案について渉外委員会として検討中であり、現在内陸活断層の古地震学セッションの提案がある。地質学会との共催シンポジウム及びトピックセッションでの発表内容を中心に、地質学雑誌に特集号を組む方針が提案され、第四紀学会側の世話人 2 名を含めて検討中である。

2. 2011 年会計中間報告

会計幹事より、会計中間報告が行われ、INQUA 第 19 回大会準備費として 200 万円を INQUA 組織委員会事務局に払い込んだこと、昨年度請求があった INQUA 招致のためのパンフレット印刷代を今年度予算から支出することなどが報告された。

3. 特別委員会中間報告・学術会議報告

各担当委員より、以下の報告がなされた。

1) 教育・アウトリーチ委員会報告

2012 年度の文科省科研費（研究成果公開促進費）に、夏の大会時の普及活動「彩の国さいたまで自然の歴史を発見しよう」、シンポジウム「高等

学校における地学教育と地理教育の連携に向けて」の2つを申請した。2012年2月4、5日に2011年度の文科省科研費（研究成果公開促進費）による普及イベントを企画し、準備中である。（なお評議員会出席者から、ジオパークに対しても学会として積極的に対応する必要性が指摘された。）

2) 日本学術会議地球惑星科学委員会 INQUA 分科会報告

2011年10月1日から第22期日本学術会議の活動が始まり、INQUA分科会の継続設置申請は11月16日開催の幹事会で承認され、新しい分科会が発足した。2015年のINQUA大会日本開催準備のため、委員を増やしてINQUA分科会を組織し11名とした。12月27日に第22期・第1回分科会が開催され、以下の報告・議論があった：経過、組織委員会の概要、日本学術会議との共同主催等について説明し、分科会の役割を確認した。2013年IGU地域会議京都大会の準備状況、国内研究機関や日本ジオパーク委員会との連携、海外巡検の実施等に関連し、意見交換が行われた。平成24年度代表派遣について検討した。INQUA執行部（2011～2015）と研究委員会対応について説明し、日本からのコミッションへの参加、プロジェクト提案等をすすめ、INQUAとの密接な連絡をとっていく必要性が確認された。INQUAプロジェクトへの応募（1月30日締切）を要請し、国内での情報共有について検討した。IUGSによるCalabria階基底、Vrica GSSPの批准について報告された。INQUA国内委員会の位置を明確にし、メンバーを拡充して引き続き設置すること、斎藤文紀2011年派遣代表を委員長とすることを確認した。

3) 国際第四紀学連合第19回大会組織委員会報告

組織体制について、プログラム・巡検・会場・広報・財務・招聘・募金出版の各委員会責任者、事務局などのメンバーが報告された。

4) 研究委員会総括報告

2008年2月～2012年1月の活動期間における5つの研究委員会の総括報告が行われた（詳細は、本号の研究委員会総括報告欄参照）。

4. 審議事項

1) 学会賞選考委員の承認

菊地隆男、佐藤宏之、鈴木毅彦、松浦秀治、百原 新の5会員を2012年日本第四紀学会学会賞選考委員とすることに対して承認された。

2) 論文賞選考委員の承認

齋藤めぐみ、佐瀬 隆、豊田 新、藤原 治、米延仁志の5会員を2012年日本第四紀学会論文賞選考委員とすることに対して承認された。

3) 名誉会員候補者選考委員の承認

齋藤文紀、田村俊和、山崎晴雄の3会員を名誉会員候補者選考委員とすることに対して承認されたが、評議員より選考委員を5名に増やす提案がなされ、2名の追加が検討された。（後日、小池裕子、辻 誠一郎の2会員を追加する提案が幹事会より評議員会メーリングリストを用いて提案され、承認された。）

4) 法務委員の承認

法務委員会常任委員5名の任期満了に伴い、岩田修二、坂上寛一、諏訪 順、松下まり子、渡邊眞紀子の5会員が次期委員として承認された。また、他の委員会等との改選時期を統一させるため、新委員の任期は2013年7月末日までとされた。

5) 会費減免申請の承認

2011年大会総会において会則が改訂され、特別な事情がある場合に会費の減免をすることができると追加された。2011年度会費に対して、会費減免申請書として減免を希望する理由を示し罹災証明などの証拠書類を添付した1件の申請があり、2011年度の会費を免除することが承認された。

6) 研究委員会の承認

2012年1月～2016年1月までの期間における4つの研究委員会：テフラ・火山研究委員会、古気候変動研究委員会、「最終氷期最盛期における北東アジアの生態系変遷と人類の応答」研究委員会、古地震・ネオテクトニクス研究委員会の設置が承認された（本号の新研究委員会紹介欄参照）。

◆ 2011 年度第 4 回幹事会議事録

日時：2012 年 1 月 21 日（土）10:30～11:00

場所：奈良女子大学 総合研究棟 S201 号室

出席者：遠藤、小野、竹村、久保、池原、高田、長橋、
兵頭、水野、三田村、奥村（学術会議）

- 1) 2011 年度第 2 回評議員会の議事進行について確認した。
- 2) 会費減免の金額や申請期限について議論を行った。
- 3) ホームページ用の新しいサーバー名について検討した。

★★★ 第四紀通信に情報をお寄せ下さい ★★★

第四紀通信の原稿は随時受け付けております。

広報幹事：兵頭政幸（mhyodo(at)kobe-u.ac.jp）宛にメールでお送り下さい。

第四紀通信は奇数月月上旬原稿締め切り、偶数月 1 日刊行予定としていますが、情報の速報性ということから、版下が完成した段階でホームページに掲載するよう努力しています。奇数月 15 日頃にはホームページにアップするようにしていますのでご利用下さい。

日本第四紀学会広報委員会 神戸大学 内海域環境教育研究センター 兵頭政幸

〒657-8501 神戸市灘区六甲台町 1-1 FAX：078-803-5757

広報委員：糸田千鶴 編集書記：岩本容子

日本第四紀学会ホームページ <http://quaternary.jp/> から第四紀通信バックナンバーの PDF ファイルを閲覧できます。

日本第四紀学会事務局

〒169-0072 東京都新宿区大久保 2 丁目 4 番地 12 号 新宿ラムダックスビル 10 階

株式会社春恒社 学会事業部内

E-mail：daiyonki(at)shunkosha.com 電話：03-5291-6231 FAX：03-5291-2176